

私の文化研究

「花笠音頭」「花笠踊り」の発祥の地を訪ねて



中村和貴 (大津市立瀬田東小学校)

1. はじめに

2018年秋に2年生で民舞「荒馬」を運動会の学習として実践しました。それは、私自身が踊り方すらよくわからなかった状態からの実践であり、子どもたちに踊り方を教え終わったと言っても過言ではありませんでした。学年の先生や子どもたちに、いくら荒馬の文化的価値や民衆の思いなどを説いても、私自身が伝え知った情報であるため、どうしても説得力に欠け、自信が持てませんでした。

その冬、沼倉学さん(宮城支部)の実技講習会にて、民舞の文化研究には、現地へ赴くことが大切だと気づいたのです。

翌年、2019年は4年生の担任になりました。本校では例年運動会の4年生の演目は「花笠踊り」と決まっていた。ねらいは、足腰を鍛えて体力向上を目指すもので、学習方法は劇団わらび座の教則ビデオ通りに教師が教え、子どもが踊るのです。「例年通りではいけない!」との思いに駆られ、ならば「発祥の地へ行ってみよう。ルーツや現地の思いがあるはずだ。」と思い立ったことが、私の今回の文化研究のきっかけです。

2. 「花笠音頭(歌)」と「花笠踊り」の発祥

私は2019年夏発祥の地、山形県尾花沢市を訪ねることにしました。私が赴いたのは、徳良湖にある花笠踊り資料館と、そこで紹介された

一般社団法人「尾花沢市観光物産協会」です。その事務局、阿部かおるさんに歴史から踊りまで丁寧に教えていただきました。阿部さんは、踊り方の講師や、銀山温泉での催しで踊り手としても活躍されています。

以下は主に阿部さんに教えていただいた内容です。

花笠音頭の始まりは、1919年山形県尾花沢の地に徳良湖を作るための、地面を掘り固める大規模築堤にさかのぼります。当時の歴史的背景として、1918年米騒動から分かるように、米の高騰によって民衆は困り果ていました。そこで尾花沢の地に、徳良湖を築くことで、農業用水として用いて、開田しようとしたのです。



写真1 徳良湖周辺の水田(阿部さん空撮)

湖の築堤工事は2年に及ぶ工期で1日300人のべ7万人の若者男女たちが労働者として集まりました。労働は過酷かつ単調なものでした。男は土を掘ってはもっこを担いで運搬しました。女は10人ほどで20~60kgの石を口

ープで引っ張り上げては落として地面を固めるという土つき作業をしました。息を合わせなければ石は持ち上がり危険で、また、励まし合うことも不可欠だったのです。このように、地区ごとのグループに分かれての重労働としばしの休憩の繰り返しの仕事でした。



写真2 息を合わせた土つきの再現（阿部さん撮影）

そんな中、現場監督から「土つき唄」を懸賞金つきで募集されると、労働者が歌詞を出し合い、選りすぐられて現在の「正調花笠音頭」の元となりました。また、労働者たちは休憩の時間に、かぶっていた菅笠を手に取り、その「土つき唄」に即興でふりをつけていったものが、花笠踊りの始まりとなったのです。

よって花笠踊りには、作業工程が表現されています。例えば、**天気を表現、土を掘って、はらい落とす動作、土つきの動作、わらじの土落とし、笠であおいで風送りの動作**などがあり



写真3 モッコを担ぎ運搬の再現（阿部さん撮影）

ます。

3. 「花笠踊り」の変遷と種類

①尾花沢の花笠踊りは、「正調花笠音頭」で作業工程を表現した「花笠踊り」なのです。尾花沢では保存会が作られ、今なお尾花沢市内の5つの地区で踊り継がれている花笠踊りが5流派のみ残っています。

上町流＝ 力強い踊り

寺内流＝ 風送りのダイナミックな笠回し

原田流＝ しとやかに流れるような踊り

安久戸流＝ 原型にもっとも近い踊り

名木沢流＝ 土を掘る、固める仕草が独特

② 1955年、尾花沢の隣の大石田町では、レクリエーションとして花笠踊りを取り入れようと、円陣型、行進型になりました。（尾花沢の踊りは、定位置で踊ります。築堤工事の休憩中に、どこへも行かないからです。）

③ 1963年、山形市も東京オリンピックに向けて、歌詞を変えて「花笠音頭」を作り、行進踊りを作りました。これは山形県として、東北三大祭りに追随しようと県下で普及している「花笠踊り」になりました。現在も山形花笠まつりで踊られています。

④この音頭に、劇団わらび座による踊りのアレンジが行われ、全国の学校現場にも教材として、広まっています。（尾花沢の5流派の中では、上町流の踊り方が最も似ている。）

このように、「花笠音頭」・「花笠踊り」には、変遷がありますが、発祥の地として尾花沢市は頑なに、従来からの踊り方で踊られ続けています。私たちがお目にかかるのは、尾花沢市で行われる花笠まつり（毎年8月27日28日）、銀山温泉内での催し（5月～10月毎週土曜日）しかありません。また、尾花沢市内の小学校では、全校児童で踊られている学校があるようです。

4. 発祥の地尾花沢の踊りに こめられた思い

花笠音頭の始まりは、築堤工事の重労働の中、危険を回避するために息を合わせられるように歌われました。また、気分転換するために陽気に歌われました。そして、時に仲間を励ますために、笠で扇いで労うために、踊られました。2年間の工期でしたが、その後も、近隣の村々で祝いの宴で歌われたり踊られたりしてきました。

阿部さんに話を伺っていると、尾花沢の人々は、他に同調することなく踊り継いできた5つの流派を大切にしていきたいという熱い思いが強く伝わってきました。またアレンジや簡易化することなく踊ってほしいとおっしゃっていたのが印象的でした。

花笠音頭の中で耳に残る「ヤッショ、マカショ」の掛け声があります。これには意味があります。尾花沢の方言で「田んぼに水をやりましょう」という意味になるとのことです。当時は「ヨヤサーヨヤサー」であったとのことですが、昭和に入り、「ヤッショ、マカショ」に変わったそうです。なぜ変わったのかは、わかりませんでした。

現地の方にとって花笠踊りを、とても大切にされていることがよく分かりました。きっと誇りに思われていることでしょう。

5. 実践に向けて

私は、帰路につき、どのように教材化できるだろうかと考えていました。学年5クラスで5流派を踊れたら、なんと素晴らしいことか。いや、1流派にしぼって踊ろうか…と。

阿部さんは花笠踊りの踊り手であり、講師でもあるので、私は5流派の全ての踊り方を教わりましたが、私には到底覚えきれませんでした。

購入した教則DVDを何度も見返すも、なかなか難しいものでした。運動会まで短い取り組み期間では、子どもたちには踊り切らせることは難しいと判断しました。そもそも学校備品の花笠と、現地で用いられる花笠では大きさ、造りに違いがあり、肝である笠回し自体が困難なのです。教材化を半ばあきらめかけてはいましたが、学年の先生たちが、私の山形県まで赴いた熱意を買ってくれ、どんな形でなら取り入れられるかと前向きに共に考えることになりました。

そこで、尾花沢の花笠踊りの要素を厳選することが求められたのです。私の中で、ピンときていたことは、「ヤッショ、マカショ」の掛け声です。方言で「田んぼに水をやりましょう」の意味は、「あなたを幸せにしましょう」という、大きな意味としてとらえられるなど思えたのです。4年生の学年目標が「四つばのクローバー」ということもあり、「幸せ」という意味合いで、花笠を踊る価値を見いだせると思ったのです。子どもたちも「ヤッショ、マカショ」と声を出しながら踊るので、互いを励ましながら、また他の学年や保護者、観客への相手意識を持てるだろうと思いました。

従来のわらび座の花笠踊りをメインで踊る中に、尾花沢の花笠踊りである寺内流を簡略化して入れ込むことにしました。寺内流を選んだこととして、わらび座とは、踊り方が大きく違うことです。くるくると回転させる笠回しと、笠で扇いで風を送って相手を労わる踊りだからです。

教材化するために、私自身の思い通りにはいきませんでした。また、現地の阿部さんの「踊りを変えずに」という思いに応えることは、なかなか難しかったのですが、なんとか実践へ向かう方向性が見えてきたのでした。

6. 実践から

「花笠音頭」「花笠踊り」の発祥や変遷など、これまで述べてきたことをパワーポイントにして子どもたちに伝えました。また、これは夏休みに全職員にも研修の一環として伝えることができました。「そうなんだ。初めて知ったよ」という様子だったことを記憶しています。

実践後、子どもたちから、「踊り方の違い」や「体の使い方」の気づきなど、特段感想があったわけではありません。私も特に投げかけはしませんでした。踊り方について「出てくるといいな。」ぐらいに思っていました。なぜなら、踊りを簡略化しているからです。

しかし、踊り方ではない内容で、このような感想がありました。以下、一部抜粋です。

・「ハーヤッショーマカシヨ」を大きな声で言いたいです。気合いも入るし、はずかしさも消えるし、4年の元気をみんなに見せたいです。

・いよいよ本番が始まりました。花笠をおどっている時、心の中で「〇〇ちゃん頑張れ」と言っていました。今まで練習をがんばってきたからです。

・お母さんやお客さんをよろこばせようとおどりました。目線に気をつけて、指先まで意識しておどりました。

・（演技後）応援席で、お母さんが来て「がんばったね。」とよろこんでくれました。

これらは何の変哲もない感想です。私の文化研究を運動会の学習に盛り込まずとも、出てきた感想かもしれません。しかし、「相手を励ま

す気持ち」や「幸せを分け合おう」のような意味合いが含まれているのではないかと読み取れるのではないかと思います。

7. おわりに

しかし、子どもたちは「ヤッショ、マカシヨ」と現地に思いを馳せて、「めでた、めでたの♪」と笑顔いっぱい幸せをふりまく花笠踊りをしたわけではありません。私は、そのように踊らせたかったのですが…。この実践をふり返ると、大きく立ちはだかっていたのは、本校の先生たちの「民舞学習」の認識でした。4年生で「花笠踊り」、5年生で「ソーラン節」を踊るのは、十分に足腰を鍛えて6年生の「組体操」へつなげるという体力向上。そして忍耐力をつけるというのが民舞に取り組む意義だということです。そのため、きりっとした真剣な顔つきと鍛えてきた精神で民舞を踊り切り、抱き合わせのリズムダンスはノリノリでとびきりの笑顔で踊る。それが、4年生の団体演技として、緊張と緩和のメリハリを生み出して良いということです。さらに、今回は学年での体育指導の役割が私ではありませんでしたし、この認識を打破するのは、私にとって容易ではありませんでした。

今回は私の文化研究を見事に活かし切った実践とは言い切れませんが、これに終わることなく、文化研究そして実践を続けていきたいと思えます。



写真4 子どもたちへ意欲づけのため一枚



花笠音頭の源流を辿って

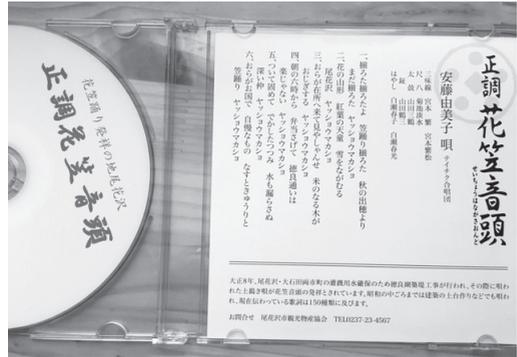
詳しくは本誌p.40「私の文化研究：「花笠音頭」「花笠踊り」の発祥の地を訪ねて」をお読みください

中村和貴（滋賀・大津市立瀬田東小学校）

かつて先人たちは山形県尾花沢市に徳良湖をつくって開田しようとしてました。過酷な重労働の合間に働き手によって歌い踊られ始まったのが、花笠音頭であり花笠踊りです。以下は、私（中村）の記録写真の一部です。



大勢の若い働き手が、周辺の地域から、集まりました。徳良湖のそばにある花笠音頭資料館にて。



源流の花笠音頭の歌詞はこちらです。作り手は働き手なので、労働のこと、そして徳良湖周辺のことが語られています。



女性たちが、息を合わせ引っ張り上げては落とし、底を回っていきます。（再現写真）



（左）現地で使われている花笠（右）本校で使っている花笠
大きさだけでなく、内側にも違いがあり、笠回しのために指をかける雨傘のような骨もあります。



実際に使われた石で、22kgとあります。1人で持ち上げても、役に立ちません。みんなの力が必要です。



徳良湖のほとりにある、石碑で記念に撮りました。子どもたちへの意欲付けに見せました。